



**Data** 2021-138  
監督・撮影・製作: アレクサンダー・ナノウ  
出演: カタリン・トロンタン / カメリア・ロイウ / テディ・ウルスレアヌ / ヴラド・ヴォイクレスク / ナルチス・ホジャ

## 👁️👁️ みどころ

ルーマニアは日本に縁遠い国だが、本作に見るライブハウスでの大火災を契機として露呈した、手術用消毒液の製造販売業者、病院、政府ぐるみの汚職腐敗構造はひどい。これは消防法違反による区長の辞任ではすまないのでは？

驚くのは、本作が「Based on the true story」ではなく、ドキュメンタリー映画だということ。“改革”と“突破力”を売りにした33歳の若き新保健相をはじめ、病院を内部告発した医師も、巨大な国家の嘘に迫る報道記者も、本作のための自由な撮影を監督に許可したから、すごい。そのため、カメラはテレビでいつも見ている記者会見の表の姿だけでなく、その裏側にひそむ人間たちの心の葛藤に迫っていくことに。

「自民党をぶっ壊す」と叫んで抵抗勢力を一掃した小泉改革はすごかったが、さて新保健相によるルーマニアの医療改革は？抵抗勢力の反撃は？そして、激戦後に訪れる総選挙の洗礼は？

— \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \*

## ■□■ホントに本作はドキュメンタリー映画？！■□■

東欧諸国の1つであるルーマニアは日本には縁遠い国だが、チャウシェスク政権の悪名だけはよく知られている。そんなチャウシェスク独裁政権末期における、ルーマニアの人工妊娠中絶問題を描いた問題提起作が『4カ月、3週と2日』(07年) (『シネマ18』334頁) だった。1980年代のルーマニアを舞台にした同作は「カンヌ最高賞も当然！」と思わせるに十分な傑作だった。しかして、本作パンフレットのAWARDに「32受賞50ノミネート 2021年アカデミー賞 国際長編映画賞・長編ドキュメンタリー賞2部門ノミネート」と書かれている本作は？

本作はアレクサンダー・ナノウというルーマニア人が監督・製作・撮影したドキュメン

タリー映画だが、ドキュメンタリー映画特有のインタビューもナレーションもない。彼の撮影対象になった主な人物は、①ガゼタ・スポルトゥリロル紙の編集長を務めるスポーツ記者のカタリン・トロンタン（47）、②内部告発者になるブカレスト大学病院の麻酔医の女性、カメラリア・ロイウ（47）、③保健相のヴラド・ヴォイクレスク（33）の3人。異彩を放つのは、2016年5月～12月までルーマニアの保健相を務めた、当時33歳のヴラド・ヴォイクレスクが登場すること。コロナ禍の日本では新型コロナウイルス感染症対策担当大臣の西村康稔氏が連日TVに登場していたが、アレクサンダー・ナナウ監督のドキュメンタリー作品たる本作に、なぜ現職のヴラド・ヴォイクレスク保健相が登場するのか？本作を鑑賞するについては、その点をしっかり考えたい。

## ■□■ライブハウスで火災発生！死者の広がりなぜ？■□■

本作のメインタイトルになっている「コレクティブ」は、ルーマニアのブカレストにあるライブハウスの名前。2015年10月30日、大観衆の大歓声と共にヘビメタバンドの歌声が盛り上がる中で発生した火事は、出口が一つしかなかったため、27人が死亡、180人が負傷するという大惨事になった。ブカレストの市長は、消防が許可していないナイトクラブに営業許可を与えた疑いで身柄を拘束されて辞任。ホンダ首相も辞任した。

もっとも、本作のテーマはそれではなく、本当のテーマは、そこから始まる恐るべき医療や病院を巡るルーマニア国家全体にわたる恐るべき汚職構造システムだ。火傷で病院に運び込まれた患者たちの治療はいかに？良質な治療を受ければ症状は改善するはずだが、実際は逆で、その後数カ月の間に次々と死亡者が拡大し、64名までになってしまったから、アレレ。それは一体なぜ？世界中を襲うパンデミックとなった新型コロナウイルス騒動では、各国の医療の問題点が露呈したが、本作でガゼタ・スポルトゥリロル紙のスポーツ記者カタリン・トロンタンが見つかったのは、ヘキン・ファーマ社が製造販売する手術用の消毒液が希釈されていたため殺菌能力にかけ、それによって多くの人的被害が出た、という恐るべき事実だ。しかも、そのことを製造会社はもとより、病院や政府等の関係者は十分知りながら、それぞれの利益や利権のために隠ぺいしていたということだ。その内部情報の提供者になったのが、ブカレスト大学病院の麻酔医のカメラリア・ロイウだ。

## ■□■記者も保健相も、自由な撮影を許可！■□■

優れたドキュメンタリー映画は多いが、ドキュメンタリーである以上、当然限界がある。逆に、物語にすれば自由だが、いくら「Based on the true story」であっても、それはあくまで作り物のドラマになる。しかし、本作を製作するについて、アレクサンダー・ナナウ監督は、ガゼタ・スポルトゥリロル紙のスポーツ記者カタリン・トロンタンからも、ヴラド・ヴォイクレスク保健相からも自由な撮影をOKしてもらっているからビックリ。カタリン・トロンタンだけならまだしも、コレクティブ事件によって辞任を余儀なくされた前保健相に代わって新たな保健相に就任したヴラド・ヴォイクレスクがアレクサンダー・ナナウ監督にドキュメンタリー映画の自由な撮影を許可したのは大きな驚きだ。

パンフレットにあるアレクサンダー・ナナウ監督のインタビューでは、この両者の撮影許可について詳しく説明しているから、これは必読だ。大臣の記者会見はどの国でも見られるが、それはあくまでも公のもの。その背後にさまざまな葛藤があるのが当然だが、それは決して公にならないものだ。しかるに、本作のカメラはそこに肉薄しているからすごい。保健相についてなぜこんなことができたかは、ヴラド・ヴォイクレスクのキャラクターによるものが多いようだが、ドキュメンタリー映画多しと言えども、現職の大臣を自由に撮影したドキュメンタリー映画は、本作が最初で最後では？

## ■□■新保健相の医療改革は？突破力は？抵抗勢力の反撃は？■□■

日本は議院内閣制の国だから、閣議の一致が不可欠。いくら保健相が改革を目指しても独断専行はできない。その点、ルーマニアがどうなっているのかはわからないが、本作では「コレクティブ事件」の処理（政策）についてルーマニア政府の方針が全く見えず、すべてをヴラド・ヴォイクレスク保健相が仕切っているように見えるのが、私には不思議だ。それはそれとして、注目すべきは、コレクティブ事件の責任をとって辞職した前保健相に代わって新たに保健相に就任したヴラド・ヴォイクレスクの改革の意欲と突破力だ。

去る9月29日の自民党総裁選挙では、突破力を“売り”にした河野太郎氏が敗れたが、それはなぜ？それは本作に見るヴラド・ヴォイクレスク保健相の突破力と比べてみれば一目瞭然だ。コレクティブ事件で病院に収容された負傷者たちが次々に死亡していったのは、内部告発者のカメラ・ロイウによると、手術用の消毒液の希釈。そしてこれは癒着した犯罪的ともいえる製造販売会社をはじめとする医療界全体の構造的腐敗から生じたものだ。したがって、ヴラド・ヴォイクレスクが目指す改革は、その一掃。それは、たしかにかっこいい。しかし、それまで癒着構造によって利権を享受していたいわゆる既得権益の受益者たちの反撃は？改革を強めれば強めるほど、反撃の力も強くなるのは当然だ。冒頭での説明によると、ヴラド・ヴォイクレスク保健相の改革は次の総選挙までの1年間の期間限定らしい。さあ、ヴラド・ヴォイクレスクの突破力は？

## ■□■結末はいかに？ハッピーエンド？それとも？？■□■

本作ではカタリン・トロンタンとヴラド・ヴォイクレスクの自由な撮影を許可されたことその他、コレクティブ事件で負傷した29歳の女性、テディ・ウルスレアヌの自由な撮影が許可されたのも驚き。テディ・ウルスレアヌは頭や体に重度の火傷を負い、指は切断しなければならず、容姿は大きく変わってしまっていたが、あくまでも前向きで生きること喜びを感じていた。新しい自分を受け入れ、自分のトラウマをアートで癒すことで他の人の手本になりたいと考えていたから、さあ彼女をモデルにした展示会の反響は？

他方、本作後半は、ヴラド・ヴォイクレスク現保健相の医療制度改革に異論を唱える守旧派勢力の抵抗ぶりがたっぷり描かれるのでそれに注目。わが国では、2001年に小泉純一郎首相は「自民党をぶっ壊す」と叫んで“郵政解散”を断行し、以降、竹中平蔵氏を重用して改革を進め、抵抗勢力を封じ込めていった。しかし、小沢一郎が唱えた“政権交

代”を2009年8月30日の総選挙で実現した民主党政権は、華々しい船出とはウラハラにその後、鳩山由紀夫、菅直人、野田佳彦と一年ごとの政権交代を余儀なくされ、計3年で崩壊してしまった。しかして、ヴラド・ヴォイレスクの医療改革の結末はいかに？ハッピーエンドになるの？それとも・・・？それはしっかりあなたが目で。

2021（令和3）年10月29日記